



Be creative !

「皆さんは自分の命を大切にしていますか」

11月2日、GFSⅡの授業を通して、私は齋藤幸男先生と出会った。こんな通信では到底書き表すことができないほどのパワフルな方だった。率直な方だった。一本人間としての太い筋の通った人だった。だから、安易な言葉ではこの人の紹介なんてできない。通信に載せることを迷った。しかしながら、「今、この人のことを書かなかつたら、一体、次のチャンスが来るのか。」と考えたら、書くしかないと思った。不十分であろうが、至らなからうが、この出会いを言葉として残しておくべきだと思った。齋藤先生と直接知り合えた生徒の皆さんは2年生のたった33名なので、簡単に先生の紹介をしておく。2011年3月11日の東日本大震災の当時、石巻西高等学校の教頭であり、急遽、避難所となった勤務校の教職員のリーダーとして44日間の避難所運営の指揮を執る。体育館が最大700名の遺体安置所・検視所となるなか、400名の地域住民の避難生活を教職員で支える。数多くの苦難の中、先生を突き動かしたものは力強く再生をしていく教え子たちの姿だった。



私は子どもの語り部になりたいー雁部那由多君

今月号の通信のタイトルは雁部那由多君の言葉である。齋藤先生のことを紹介する通信なのに、なぜ雁部君の言葉をタイトルにしたのか、それは雁部君の思いと齋藤先生の思いが重なると私が認識するからだ。2014年3月11日、「みやぎ鎮魂の日シンポジウム」が開催され、当時中学生だった雁部君も参加をした。そのシンポジウムの最後に雁部君は次のように宣言をした。「阪神淡路大震災の後に、たくさんの語り部が震災を語り継いでいます。しかし、語り部の多くは大人です。だから私は、子どもの語り部になりたいと思います。子どもの視点で、子どもが感じたことを伝えていきたい。」齋藤先生はこの時の会場のざわめきを今でも忘れないと語る。齋藤先生の著書『生かされて生きるー震災を語り継ぐー』の終わりに、16歳になった雁部君との対談が掲載されている。雁部君は語る。「僕が『語り部』の活動で一番伝えたいのは、津波が来たという事実ではないんです。僕たちが被災した事実でも、東松島市がどう復興したかという事実でもないんです。だから聴いてくれる人にもいつも問いかけるのです。『みなさんは自分の命を大切にしていますか。一日一日を大切に生きていますか。』今回の齋藤先生のお話も突き詰めればこのメッセージに包まれた講義であり、全力で若き君たちの存在のすばらしさを語り伝える2時間であったと私は感じている。

若い人の力があればこそー避難所に必要なのは若い人の元気な声

日本各地で防災の講義を繰り広げる齋藤先生は「大人が本気にならなくては、災害に強いまちづくりはできない」と語る。しかしながら、そこに子どもや若者を巻き込んでいきたい。どうしてか。実際に災害が起こった場合、大人だけでは避難所運営はできないと先生は考えるからだ。先生は語る。「避難所では大人の喧嘩や言い争いが起こるんだよね。そんな時、そこに子どもがいると、大人は冷静になれるんだよ。またね、子どもや若者が本気になると、大人たちも本気にならざるを得ない。喧嘩なんかしている場合じゃないってなるんだよね。」避

難所に必要なものは3つある。一つ目は「水と食糧」、二つ目は「正確な情報」、そして3つ目は「人の声」。しかもこれは「若い人の声」だと先生は言う。子どもが笑うと大人も笑う。いわゆる「ミラーリング」の現象が起こるのだ。避難所で実際にこんなことがあった。野球部の生徒たちがキャッチボールやノックをし始めた。「何している



んだ、こんな時に。」先生たちは渋ったが、子どもたちの運動不足を見かねて、校庭の隅っこでやるように指示を出した。楽しんで活動する野球部の生徒たちの声が校庭に響く。すると、避難している方が口々にこう言われたそうだ。「いいねえ、先生、子どもたちの元気な声を聞いていると、気持ちが明るくなる。」先生はうれしかった。齋藤先生もまた、そうした大人の一人でもあったのである。

再生していく生徒たちを根底で支えるもの

阪神淡路大震災の後ぐらいから、「PTSD」(心的外傷後ストレス障害)という言葉はよく聞くようになり、現在ではかなり耳慣れた言葉になった。私は今回、齋藤先生の講義を通して「PTG(Post Traumatic Growth)」という言葉始めて聞いた。人間が本来持っている「悲しみや苦しみを乗り越える力」のことである。震災後、自分自身の苦しみを乗り越え、「学校をもっと楽しい場所にしたい」「地域のために働きたい」「支援に対する恩返しをしたい」と動き出す生徒の姿を通して、先生はこの本来人間が持っている「PTG」の力をまざまざと感じ取る日々を送ったと語る。先生の著書には印象的な出来事が書かれている。震災から2年後の文化祭、全校の生徒・教職員の笑顔で作られた巨大モザイクアートが体育館を飾る。校長先生であられた齋藤先生の顔をデザインしたものだった。一年前の全校集会で齋藤先生は次のように語った。「この体育館は約700名の方の遺体安置所になったところであり、今の私は、この場で大きな声で笑うことはできない。学校は、教師の力だけで復興できるものではない。生徒ひとりひとりが支え合い、高め合っていないと前に進むことはできない。」この先生のメッセージを真正面から受け止め、生徒たちは「それでも私たちは前に向かって進みたい、先生や友達と共に楽しい学校生活を創りたい」というメッセージをこの作品を通して齋藤先生に送ったのである。齋藤先生は泣いた。震災後、ずっと心の中に封じ込めてきた感情がいきにあふれ出したのだ。このモザイクアートは学校全体が前に進むための「勇気」と「希望」の象徴となった。齋藤先生が旨としている「生徒を育てるのは生徒、教師を育てるのも生徒、学校を創るのは生徒」という教えを実践する取り組みであった。

避難所・ゆりのき・和太鼓・青いこいのぼりプロジェクト・島育ち

美浜の町は先生が生まれ育った地によく似ているらしい。石巻西高等学校の校木もゆりのきであること、震災当時、同校の2年生だった伊藤健人君が亡き弟のために始めた「青いこいのぼりプロジェクト」は本校の文化祭でも企画としてとりあげられた。先生の著書を原案として製作された『有り、触れた、未来』のエンディングに和太鼓が登場すること、被災地のボランティアに出かけた生徒たちが本校にいること、私たちの学校を訪れた当日、齋藤先生はご自身の境遇と重ね合わせて、この日本福祉大学附属高校に親しみを持ってくださった。「ガシガシッ！ガシガシッ！」という独特のハイタッチもがっちり生徒たちの心を掴んだ。「名は体を表す」と言う。そのものの本当の姿・ありのままの姿が名前に表れているということだ。思い出す人の名前は「幹男・太志」そこに「幸男」が新たに加わることになる。別れ際に女子生徒が「あっ、ガシガシッ！の先生！」と言うと「よし、一緒にやるかー！」先生はその女子生徒のもとに駆けつけた。齋藤先生はご自身のことを「僕は“進化するジジイだからね。」と言われた。私のことを慮り、「先生は”退化しないオトメ“ですね。」と言ってくださった。先生、お心遣いありがとうございます。でもね、先生を見ていると、私も”進化するババア“にこそなりたいものだと思います。益々のご活躍を期待します。



奮闘する生徒たちを紹介します

女子サッカー部 “負ける気がしない”連戦連勝の闘いが続く

4-0(対 TOHO ladies)5-0(対旭丘高)5-0(刈北・若宮)2-0(対清林館)ブログを飾る彼女たちの成績に心躍る思いです。連戦はこの先、12月まで続きます。頑張れ！女子サッカー部！



陸上部 「第26回東海高等学校新人陸上競技選手権」

小川心優さん・永田夏月君出場

10月28日・29日、三重県において開催された大会に2年生の二人の生徒が出場し、小川さんは400mにて2位の成績を収めました。来年はインターハイ出場を目指して、更に努力を積み重ねてください。期待しています。



吹奏楽部

1. 美浜町文化協会主催音楽会出場

10月28日、美浜町総合公園体育館にて開催された音楽祭に河和中学校や日本福祉大学合奏研の皆さんとともに、吹奏楽部の皆さんも参加をしました。美浜町の皆さんの前で演奏披露は初めての経験でした。大きな拍手をもらいました。



2. 日本管楽合奏コンテスト全国大会最優秀賞受賞

11月5日、東京の文京シビックホールにて開催された大会。3年連続全国大会出場の中で、ついに最優秀賞の成績を収めることができた彼らに大きな拍手を送ります。



私学協会表彰 11月7日、私学協会表彰式が名古屋ガーデンパレスにて開催されました。



優良生徒表彰

柘植 あかね さん(3年生)

実用英語技能検定準1級取得表彰

沼田 匡生 君 (3年生)

文化部優秀賞表彰 和太鼓部の皆さん



先生方の紹介もします。

永年勤続表彰

伊藤先生・君塚先生

榊原先生・半田先生

半田先生は部活動の指導における表彰も受けられました。

皆さん、おめでとうございます。

